



京傳戲作

亭和交亥發行

華橋上通油街

仙鶴堂梓行

人間萬事吹矢的みん上のまじ



仙鶴堂

予一日芝神明の御社に詣で、偶吹矢の店に佇みて、一觀せしに、吹息の長きはたえずして、しかも實の的にあたらずねらひに歪む手のうちの、且はづれ且八つあたりして、一つも思ふつぼならず。金時を出さんとして化物を出し、朝比奈を出さんとして鬼を出す。千疊敷の家形は變じて奈良綠青の山となり、張貫の岩は齧りて淺黄木綿の波幕となる。其かはること速き、光陰の矢かといふかる。一心の矢あり、禍福の的あり。善惡邪正の人形あり、正にこれ三世因果。十二因縁の糸をひきて、もろくの正體をあらはすものなり。人生一代の光景、從來一筒六文の吹矢の如し。猛然として發悟し、家に回りて這册子をつくれり。

享和三年癸亥孟春

山東京傳述 印

神一日は神明乃みやうるまきとて。偶吹矢の店うまきとて一観
 と。吹息のそまふもあざとて。老も實の的あはらじ。妙ひふ
 中ひ手おももの。且らうと且らあざして。一思ふはかみく大
 金腫て出まらうと化物と出。朝比奈と出まらうと鬼と出す。
 千骨敷の家形が度して奈良緑青の山さかぬ。張貫の岩さか
 どりて。浅黄木綿の波幕さかぬ。其さかぬと速き光隠の矢ら
 どりて。一心の矢あり。禍福の的あり。善悪邪正の形あり。正見
 三世因果。十二因縁の糸とひきて。むくの正體とあらうもの。化
 人生一代の光景。從來一箇六丈の吹矢らうと。猛然うて發
 悟し。家へ回て造冊子とけくまら。

享和三年癸亥孟春

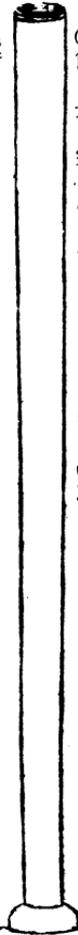
山東京傳述



吹矢道具之圖

▲この吹筒は、たとへば、人の氣の如く長きもあり、短きもあり、兎角人はこの筒の氣が長くなければ心の矢、思ふ的へ當らず。

○筒と矢と氣と心と合體せねばならぬものなり。



▲この的へ心の矢が當ると善惡邪正、善きも惡しきも、それ〴〵の人形（ひとがた）の正體あらはれ出づる。

外目で見れば、善も惡も（まこと）的は皆同じやうにて、何の人形が出るか知れねども、



この的からは善が出る、この的からは惡が出る、



といふ事は天道様はとうに御存じなり。



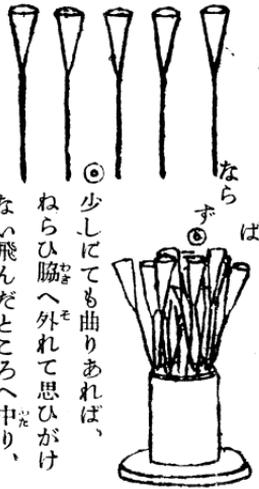
これ人の心のはかり難きこと、この的と同じことなり。

▲この糸は禍福

善惡を繋ぎとめて
おく因縁の糸筋なり。

▲吹矢の矢は人の心に喩ふ。この心の矢、如何にも眞直でなければ

人の口にあたる所に金をはめてある。金は人の口あたりよき物なればなり。



少しにても曲りあれば、ねらひ脇へ外れて思ひがけない飛んだところへ中り、または何本も素矢を食つて空しく矢代ばかりをとられ、まことの人形の形を見ることならず。これ思ふ的へ當らねばなり。

人間萬事吹矢的



それつらく月日の移り行き、光陰の速きを思ふに、
 人の一代はたゞ一筒六文の吹矢にかはる事なし。
 去年は今年と變り、昨日は今日と變り
 息子(は)親爺、娘はおば、嫁は
 姑と變ること、僅一寸的
 に細き糸筋をつけて、危く繋ぎとめ
 たる物なれば、變りやすきこと、
 瞬(た)きせぬ間なり、また吹矢の店の
 縁の下と人の心と同じ事なり。
 善の人形も悪の人形も縁の下の人
 の心のうちに隠れありて、ほか
 目からは見えす、心の矢が
 それ(づ)の的へ當れば、
 遂には正體を現はすなり。
 故に的が肝腎なり。
 ねらひが肝腎なり。



人間事吹矢的



「野郎の鐵拐仙といはゞ」

云へ。」

「なんと、おれが息は長い息であらう。」



▲吹矢の的に當れば、ガツタリと音がして人形、姿を現はす、このガツタリは合多理と書きて、多く理を合はすとよむ。この雙紙も多くの理を合せて作る。これ合多理の謂なり。憎ガツタリ可愛ガツタリも同じ道理なり。

「人がこの雙紙を見て

おかしカツタリ

すればいゝが。」

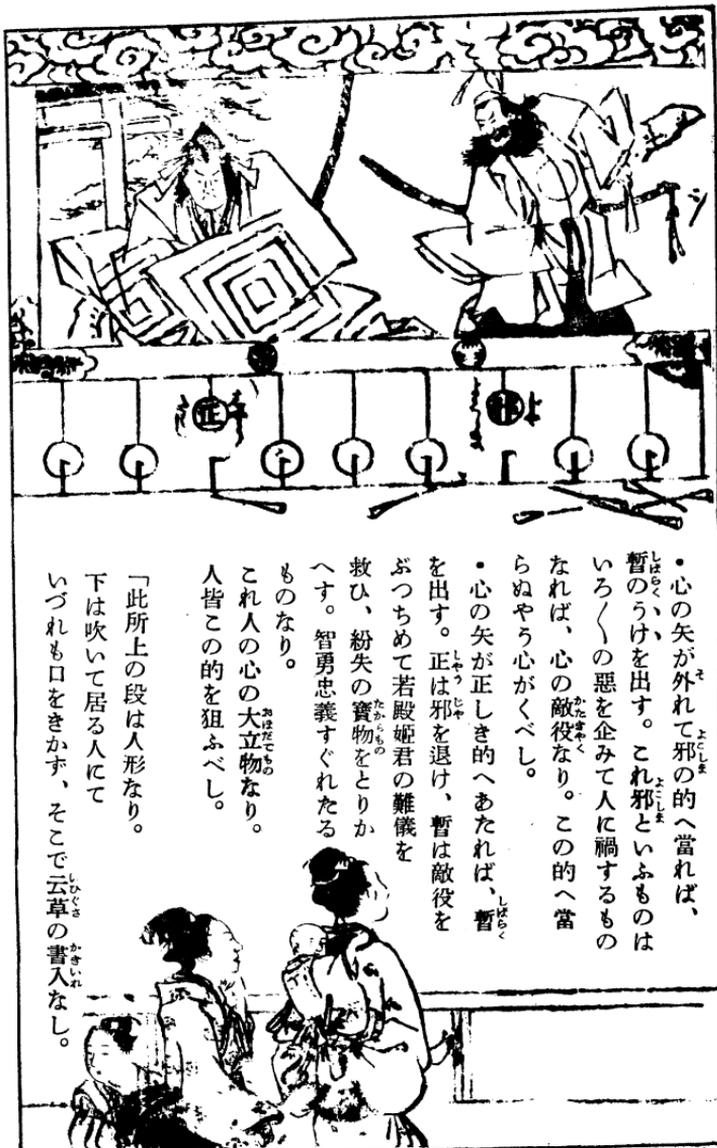
短いききある
は吹矢の縁の下だ。」

▲吹筒の氣が長く、心の矢が眞直で思ふ的へあたつても、息が長くなければ心の矢、彈き返されて人形の姿現はれず。この息、長き短きは喩へば人の壽命なり。兎角人は長生でなければ大功はなし難し。その息を長くするは平生の養生にあり。養生悪しければ、天壽も縮むるなり。

人は長生が專一なり。



問人萬事吹矢的



・心の矢が外れて邪の的へ當れば、
 暫のうけを出す。これ邪といふものは
 いろ／＼の悪を企みて人に禍するもの
 なれば、心の敵役なり。この的へ當
 らぬやう心がくべし。

・心の矢が正しきのへあたれば、暫
 を出す。正は邪を退け、暫は敵役を
 ぶつちめて若殿姫君の難儀を

救ひ、紛失の寶物をとりか
 へす。智勇忠義すぐれたる
 ものなり。

これ人の心の大立物なり。
 人皆この的を狙ふべし。

「此所上の段は人形なり。

下は吹いて居る人にて

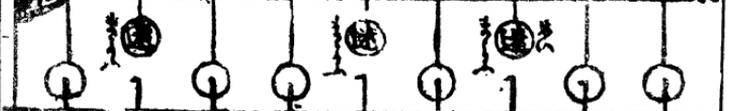
いづれも口をきかず、そこで云草の書入なし。



事きもあり
口くちをくげば
氣きにむす
なれど、どう
してか
何なにと
「かうばけた
所ところは
何なにと
「からし
凄せつじ
からし

二階にがいの
上うへの段だんの
「上の段の
二階
浅敷せんしき
人形にんぎょう
は皆みな
なれど
ば口くちを
ばきかぬ筈
「かうばけた
所ところは
何なにと

「高慢こうまんを
なんほわいら
が化けても
とらろう
「高慢を
なんほわいら
が化けても
とらろう
「高慢を
なんほわいら
が化けても
とらろう



・心の矢やが迷まよひの的てきへあたると、いろく
の化物ばくぶつを出いだす。
柳やなぎの木きを見みても幽霊ゆうれいと
思おもひ、白犬はくけんに飛とびつか
れても猫ねこ又またと思おもひ、我が
影法師かげ法師を見みても化物ばくぶつと
思おもふ。
皆みなこれ心の迷まよひにて、
われと我が心こころより
化物ばくぶつを出いだす
ものなり。

子こに迷まよへば
罪つみを作つくる。

孫右衛門まごえもん

右衛門えもん

川かわ

梅うめ

兵衛べいゑ

忠ちゅう

滅めつす。

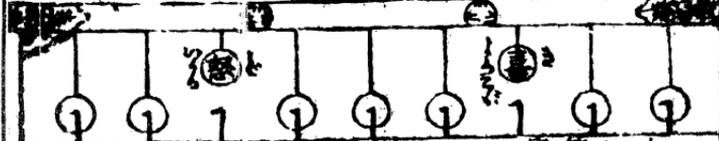
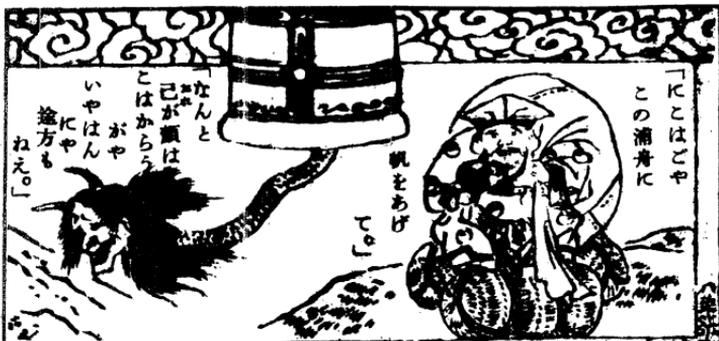
色いろに迷まよへば身みを
滅めつす。



「下の段の鶉棧敷は浮世の人なり。上の繪にて事はわかれども、下棧敷ばかりあけても置かれず、ほんの埋草の繪なり。いはどかはかしの見物の如し。下に繪があれば上は無駄なり。上に繪があれば、下が無駄なり。上が無駄か、下が無駄か石橋山の合戦と来て、いづれどつちか無駄なるべし。

心の矢が悟の的にあたれば、金時を出す。金時は化物を退治する者なり。悟は迷を滅すものなり。多き迷の化物も、悟の金時に出つくはしては五體が辣むなり。悟の力強き事を知るべし。





・心の矢が喜の的へあたれば、
大黒を出す。大黒天はいつでも
にこ〜笑つてばかり居給ふ、
笑ふ門には福來るといふ、
家内中がつね〜大黒
のやうににこ〜さへして
居れば、家繁昌疑ひなし。
随分この喜の的を狙つて
心の矢をはづさぬやうに
すべし。

・心の矢が怒の的へあたれば、
般若を出す。これ即ち心の鬼
腹立怒るより、我と我身を
責めて、片時も安き心
なし。随分この的に
あたらぬやう心がくべし。





「いくら
眺めても
おれが頭は痛
ねえ。全
ぶじみ
だ。」
西行



・心の矢が哀^{あはれ}の的へあたれば、鳥^いさしを出す。
 もろくの鳥ども、この講^{こう}に
 くつつきて悲^{かな}しむが
 如く、人もいとしい
 可愛い、會^あひたい
 見^みたいなどといふ愚^{おろ}痴^ち
 の講^{こう}竿^{さん}に自ら身をくつつけて
 歎^{なげ}き悲^{かな}しむなり。この道理^{ことわり}を悟^{さと}らざれば
 鳥^いにだも如^{ごと}かざるべけんや。

・また心の矢が樂^{たのしみ}の的へあたれば、
 西行^{さいぎょう}を出す。西行^{さいぎょう}の如く浮世^{うきよ}を
 悟^{さと}つてみれば、氣^きが樂^{たのしみ}なり。
 金持^{かねもち}ばかりが、樂^{たのしみ}をするに
 あらず。錢^{ぜに}がなくても足^{たり}
 事を知^しれば樂^{たのしみ}なり。

一 生樂^{せいらく}の的^{てき}をはづすまいと思^{おも}はざ
 食^たはず貧樂^{ひんらく}といふ道理^{ことわり}を悟^{さと}るべし。

親^{おや}に別^{わか}れ、
 子^こに別^{わか}れ、夫^{おつと}に
 別^{わか}れ、悲^{かな}しみ、
 皆^{みな}この的^{てき}のより
 來^きがつけて
 あるなり。
 これ惡^{わる}き
 因^よ縁^縁を
 引^ひく
 糸^{いと}と
 論^{ろん}
 しべむ

人間萬事吹矢的



・心の矢が虚的的へあたれば、葛の葉の姿を出す。葛の葉は顔は美しき女なれども心は畜生にて、何處ぞでは化の皮を現はす。美しき奴ほど、虚は多く實は少きものなり。
 油断すべからず。
 ・心の矢が實的的へあたると、お多福を出す。
 心に實さへあれば、顔はお多福でも不承すべし、不器量な女に
 結句貞女多し。



「その刀は葵下坂で
 よつく切れます。
 それから御覧じませ。」



利の肝心なり。

鹿のあるが如し。
 又剣に正眞あり。贖物あり
 人の心に
 實と虚のあ
 る如し。これ目

「人の魂は剣なり
 剣によく切れるとなまぐらあり。
 人に利口と馬

鹿めは何處へ行つた。
あいつまた奥山へ紅葉を
踏み分けに行き居つたか。
但し芥子之介をかばはし
か。ふくろくにくにうちに居ぬ
には困るぞ。



さてまた
次の蛸たこかな
片手片足たもちます。
此儀を名づけて
天蓋あまがさちやい。
どつと
ゆてたり。



「いもぐふの蛸もへま
昨夜ゆうべ寝ねえ
せい、か、いも
くつてならねえ。」

開運傳奇

・心の矢が運の的へ當れば
福祿壽を出す。

福祿壽の、おつむりは
延ばさうと思つて延びたるに
あらず。自然とのびたる頭こぶなり。

人も運の的へ當れば、延ばさうとも
思はず、自然と金が延びるなり。

・心の矢が不運の的へ當れば蛸の入道
を出すなり。鯛、鰯いわしは足なけれども、
立派に暮し、蛸は八本の
足あれども、口一つを養ひ
かねて岡へ上り、芋までを
掘喰ふ。人もその如く、不運の的へ
あたれば、たとへ八人前稼いでも「亭主の夜遊びに
やつぱり貧乏なり。出ぬお守は
ござりませんか。」



開運の
お守を
御頂戴
あられ
ませ
う。

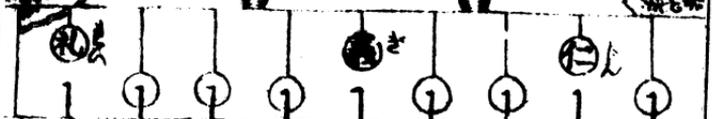
加て次第。

運 不 運



「その玉をとられてはへまき」

もう
龍けん
がなら
ねえ。



- ① 心の矢が仁的へ當れば、龍王を出す。
- ② 龍王は龍宮の主なり。
- ③ 人も家國の主となれば、仁心がなくてはならず。
- ④ 心の矢が義的へ當れば、魚を出す。
- ⑤ 魚は龍王の家來にて、よく玉を守護す。
- ⑥ これを守る玉は主人なり。よく守るは役目に怠らぬなり。
- ⑦ これを忠義の士に警ふ。



・心の矢が禮的へ當れば、寶塔を出す。いかほどの名玉も、裸でゐては信仰なし。寶塔といふ着物を着せておけば、自ら尊く見える。これを人に喻へていはゞ、上は冠より下は羽織袴に至るまで

「この五つは五當的なり。皆人の的をひて一つもはらす。」



「月夜に玉をぬかれた。」

「殘念々々。」

「魚どもあまか玉かと」

「十一段目の夜討のやうにさはぐ。」

「寶塔玉をせしめた。ほうとう玉がたの腹薬。」

四季の禮服を以て貴賤を分つが如し。

・心の矢が智的へ當れば一面海の景色とかはる。智慧の深きに譬ふ。

・心の矢が信的へ當れば、海女を出す。心の神佛を祈るも、海女が玉をとらんとする如く、一心を固めねば、利益の玉を得ることならず。

問人萬事吹矢的



これは日輪月輪様だ。
饅頭の食ひかけと
思ふまいぞ。

門からおでた
鬼の舌



・心の矢が目的へ當れば、
日月を出す。人に目のあるは、
天に日月あるが如し。
天に日蝕月蝕あり。
人にも目のくれる事あり。
慾に目がくれ
子に目がくれる。
・心の矢が口のへ當れば、
門ひらけて内より鬼を出す。
これ口は禍の門なればなり、
また口に悪を持つといふも、
人の口に戸がたてられぬといふも
この故なり。



・心の矢が耳の的へ當れば、
木鬼を出す。
木鬼は耳の邪魔なる鳥なり、
人の耳も、よい事悪い事を

いづれ
眼醫者
は様々
にある
が
中にも
わしが
療治は
奇妙だ。

人の萬事吹矢的



て、杉の上へさらり、お厄拂ひ魔所。」

「こゝから下を見ると、美しい奴がゐる、眼がくらま天狗だ。」

木兔にあはぬ眼鏡や朧月其角



聞くにつけて、大きな心の邪魔なり、また立聞、耳こすりなどろくなことはなし。

・心の矢が鼻の的へ當れば天狗を出す。

人の鼻といふ奴が、掛香の薫をかげば、心ときめき、蒲焼の匂をかげば食ひたくなる。

皆、鼻の業なり。

また高慢の鼻、

自慢の鼻、

己惚の鼻、

いづれも高し。

とかく、鼻の穴は

天狗の棲家と知るべし。



人の萬事吹矢的



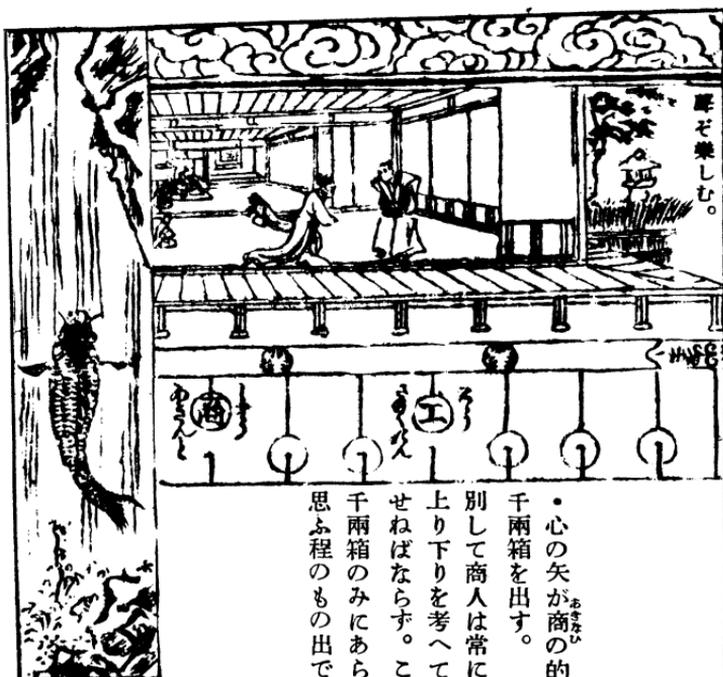
「番頭が白鼠
てなければ
金は儲からぬ。
お茶の水。
落ちては
ぐわら
ぐわら」



此士農工商の四つは、人間
一生を送る渡世の的なり。
・心の矢が士の的
へ當れば、
鯉の瀧登りを出す。
これ士の立身出世は
鯉の瀧のぼりの如く
なればなり。
・心の矢が百姓の的へ當れば雷を出す。
これは耕作に精を出せば、天の恵にて、
日照にも、雨を降らせて、よく五穀を稔らす。
・心の矢が細工人の的へ當れば、
千疊敷の座敷を出す。
職人も精を出して
上手になれば、千疊敷
の大仕事も請合つて
大金を儲けるなり。



「この渡世の的をはづ
さぬやうに心がくべし。」

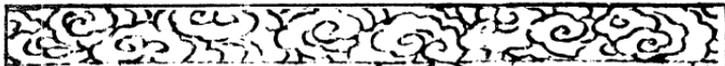


靡ぞ樂しむ。

・心の矢が商の的へ當れば
 千兩箱を出す。
 別して商人は常に代物のよしあし、相場の
 上り下りを考へて、商の的をはづさぬやうに
 せねばならず。この的へさへ當れば、
 千兩箱のみにあらず、家倉地面、
 思ふ程のもの出でずといふ事なし。



「千兩箱を
 出す糸は
 細き利の
 糸なり。
 安賣て
 なけれ
 ば繁昌
 せぬと
 知る
 べし。」

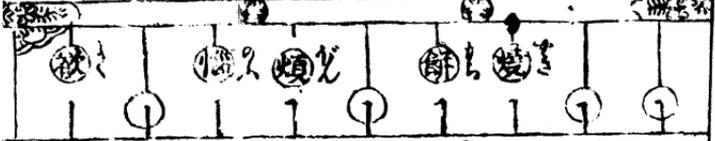


「かうよろついでには、
生酔の唐辛子だ。」

「用心の爲に
吠えるわ」

荒神様のお閻魔
とは受取
にくからう。

按摩吠えての棒ちぎりだ。」



• 心の矢が焼餅の的へ當れば、
唐辛子を背負つた奴を出す。

唐辛子はその色赤く悋氣の胸の火
の如し。その形は角の如し。

戀の奴、この悋氣の
角の戀の重荷を背負
つて苦しみ、遂に夫に

愛想つかされ、追ひ出され
辛き目を見るなり。

• 心の矢が煩惱の的へ當れば
犬を出す。

• 心の矢が欲的の的へ當れば、
座頭を出す。欲には目の

見えぬものなり。

• 心の矢が慳貪の的へあたれば
鬼の念佛を出す。慳貪婆のお看經は

鬼の念佛と同じことなり。

「これを見てはもう堪忍なら
ねえ。」

「花見より
月見より

から並べた
所はいゝ景
色だ。」





「さいて
くりやらの羽が欲しい、
鳥刺ちやあるめえし。」

「音あるかねに物問へば
鬼らは
知らんと
つ
通
る。
金をつるし
たる所は淡島様
の括猿の如し。」

日 晦 大 食 心



・心の矢が大晦日の的へ當れば、
無間の鐘を出す。常にきんくと
したる人も、大晦日になれば、
俄に梅ヶ枝がやうな氣取になり、
今降り來つたことのやうに、
金が欲しいくと騒ぎ、
無間の鐘もつく氣になるは、
いかいたはけ。



「それ〜それでは薪
が費える。燈心を一筋
減らさぬか。
なんまみ」

「さういはれては一言もなつ豆
をお寺から
貰つて

おいた
餅へ
つけて
上げ
ませ
うか。

人の萬事吹矢的



「短冊竹や〜
飾竹や〜。
「盆と正月と一緒に来
ては氣も運ぶ筈だ。」

「親の敵と
酒屋の借は
かたきとつけ
かたきとつけ
拍子で腹
む。」

「句
はひ
幽麿
反魂丹
御用なら
この間
なか〜
左様でござい。」



・心の矢が酒的^かへ當ると
狂女の人形を出す。
酒の一名を氣違水^{きちがひ}といひて
人を氣違にする毒水なり。

・心の矢が金的^{かね}的^{てき}へ當ると
敵討^{かた}の人形を出す。
金が敵の
世の中ぢや
金がなければ、
なんのいな。
とは定九郎が
金言なり。



「狐を釣るな、チンチリ
ツ、ルツ
ン
ルツ

「氣ちげえを
釣ろな。」

人問萬事吹矢的



狐の鳴き聲スボンボンこれがほんとの業腹鼓だ。

「たぬきは損氣ぢや。氣を長く腹鼓をうたう。ボン／＼ボンは今日明日ばかり。びいどろ吹けば」

「龜に沈みしさるのふちチンチリツツキヤツツキヤ」

智恵 養生 養生 心 猿 狸

・心の矢が智慧の的へ當ると、猿を出す。
 人の智慧、多くは猿智慧、猿利口なるものなり。
 眞の智慧のある人は稀なり。
 鼻の先へ出づる智慧自慢にろくなはなし。

・心の矢が養生の的へ當ると、狸を出す。
 養身持さへよければ、龜の如くの長生疑ひなし。
 ・心の矢が懸取的へ當ると、狸を出す。
 懸取がお頼み申しますといふと直に狸寝入と出かけるはよくある奴なり、卑怯千萬。



「狸寝入りの小夜衣、我がつらならぬ面な眺めそ。」



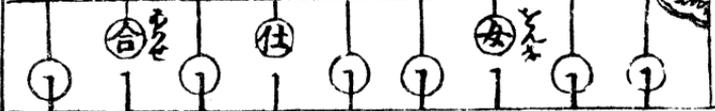
「本所の穴熊で
愚痴深い奴だ。」

「とかくわしを苛めな
さる、くまいますしい。」

「サアおれが
番だ。
だる
てまつ
らめえ。」

（主母）

（おん）



・心の矢が女の的へ當ると、
金太郎小僧を出す。

女は手に男の命を
断つ斧を持つて、
熊のやうな色黒く
髯むしやくしやにて氣の荒き
男をも、膝の下へおつかつて、
ぎょうくいはせる。
これ金太郎と女と同じ事なり。

・心の矢が仕合せの的へ當ると
起上り小法師を出す。

これ
七轉八起の
故なり。

「小僧
わんくの
ばを
踏むな。」

に五兩、これは無間の
かねの
拾ひ
残しか。」



あ ま り け り 念 力 岩

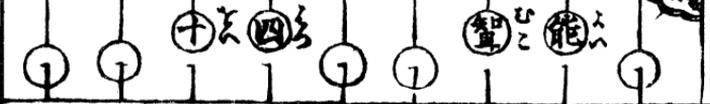
・心の矢がなまけ者の的へ當ると
 鯨を飄箆でおさへたる人形を出す。
 なまけ者は家業を
 いやがり、ぬらり
 くらりとして髭を
 くひそらすまで
 馬鹿を盡し、
 どこといつて捉へどころのなき者故
 飄箆で鯨をおさへるに喩ふ。
 この的へあたらぬやうにすべし。
 ・心の矢が念力の岩に當れば
 虎を出す。これは
 虎と見て石に立つ矢も
 あるものを、など念力の
 徹らざるべき、といふ
 歌の心なり。
 とかく人は一念凝らねば
 大功はなし難し。





「かみしもをきて十六文
あたまはりの療治。」

「今にとらまへ皮を剥
いて鬼の禪か
毛巾着に
するぞ」

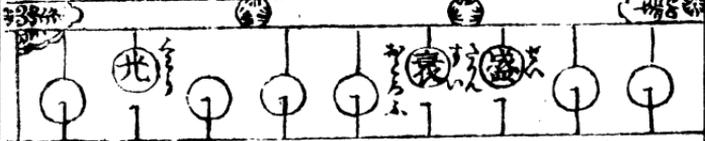


・心の矢が能智の的へ當れば
和藤内の人形を出す。その心は、
ハテ他の國で手柄をするわさ。
・心の的が四十の的へ當れば、
手を組んだ人形を出す。
とかく人は四十からよい思案が
つくものなり。
四十になつても思案の定まらぬ
ものは、一生埒があかず

商人の大頭になるは
よい思案が肝腎なりと知るべし。

「今年も大分
延びが見える。
鼻毛とちがつて
金の延びるは
いゝものだ。」

「まだわから
てまごつかず
むこさま方
には腹薬。」

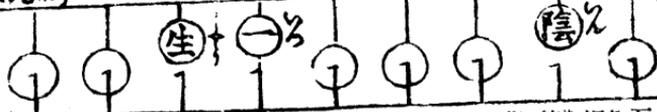




「かほのまじめは
春駒なんぞは
船に見てさへ
よいとや申す。」

夢が
覚めて
しまへば
榮華過ぎての
棒ちぎりきだ。」

一生



白紙、芥子之介が泥鰌となり
瓦は海中に入つて、
温石となり、
節季候一夜越せば
萬歳を聞く。

これ皆光陰の早く走るのが「屠蘇に酔つてこはい
故なり。」

うか／＼として
暮すうち

極樂か地獄へ
鞍替目前なり。

・心の矢が一生の的へ
あたれば

塵生の人形を出す。
これ一生は夢なるが
故なり。

あがりませう。

又と開帳はかなひませぬ。」

「きやつきやと

小猿や

節季候

人間萬事吹矢的

佛様は、地口
などは、まっ
しやらす。

「閻魔さん方、
亡者衆、地獄の中で
こなさんの。

「慳貪婆ア、何事も情を
張りし報いにて
淨玻璃の鏡にうつる。



正直爺は
狐拳をうつ
やうな
身を
して
居る。

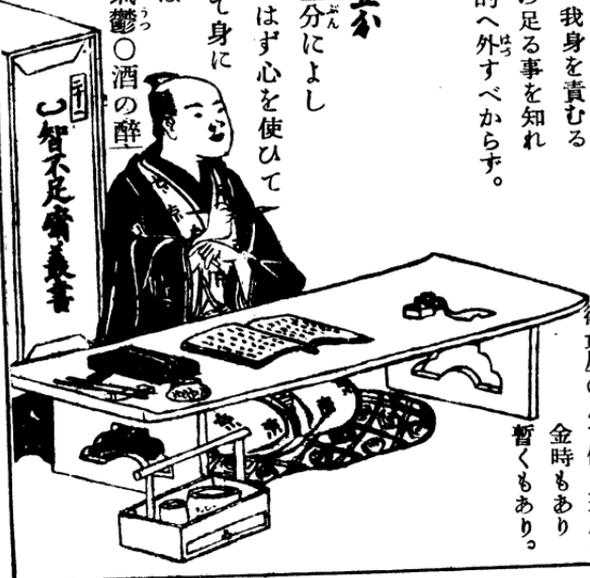
「慳貪婆は
繼子を叱つ
て居る形
なり。
すわと云は
ば横ツ面を
握拳を膝
の上に拵へ
て待つて
居る
ところ。

心の矢が善の的へあたれば、極樂の態相を出す。惡の的へあたれば地獄の有様を出す。この地獄極樂は先の世にあるのみにあらず、有財餓鬼とて金持にも餓鬼の苦しみあり。我心の鬼、我身を責むる活地獄この世にあり。又たとへ貧しく暮すとも我身の足る事を知れば、生きながらの極樂なり。人間萬事心の矢を善の的へ外すべからず。これ人の一生は吹矢の如しといふ謂の縮括りなり。

讀書丸 清覺世道人傳方 一包十五粒入 代堂丸五分

○氣根を強くし物覺えをよくす。○心腎の虛分によし
 ○氣の方ふらく患ひによし。○常に身を使はず心を使ひて
 心勞多き人、老若男女によらず、一週り用ひて身に
 覺ゆるしるしあり。○道中なされ候か、又は
 病身の人は常に懷中に貯へべき藥なり。○氣鬱○酒の酔
 ○癩痞○腹痛の類、一粒にて即效あり。
 委しくは
 能書に誌す。

▲賣弘所江戸 京傳店



さきの年、市川白猿
 葺屋町の顔見世に
 御最良の息で働く葺屋町
 金時もあり
 暫くもあり。

的矢吹事萬間人

○矢の根五兩

玉磨かざれば光なし。玉といへども、なんぞ親爺の頭の如く磨かずして光るべけんや。心の矢の根も先づその如く、よく磨かざれば役に立たず。齒磨にて齒を白くする息子、洗粉にて衿を磨く娘は多けれども、心の矢の根を磨く人なく、錆だらけな心が澤山なり。心の矢の根を磨くには先づ堪忍が第一にて、堪忍五兩負けて三兩といへば、これを矢の根五兩と名づけて此半丁のおまけに添へて上ます。

も一つおまけに御披露あり。

當年も相變らず新切御

御進物御

縮緬蠟引御

新型御

御鼻紙入類 新切類 品々

京傳店

東風吹矢香を射とめん梅の的

矢の字で切れぬ所がめでたし



醒世老人 京傳戲作